原　　著　　大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　No.39，2022
キーワード：社会科指導法，アクティブ・ラーニング，KP 法

社会科指導法の新たな試み
― KP 法を用いた授業実践を通して―

甘　利　弘　樹*

（令和４年１月 24 日受理）

【要　旨】　本論文は，KP 法を用いた社会科指導法に関する授業実践について分析するものである。当該授業実践を通して，社会科指導法の授業におけるアクティブ・ラーニングの要素の深化を見いだすことができた。

Ⅰ　問題と目的

１．はじめに

本論文は，小学校社会科の教員養成を目指した歴史学習の授業の中で，新しい試みを行う内容を論じたものである。

小学校の学習指導要領に伴って，小学校の教育現場はもとより，小学校教員を輩出する大学教員養成学部・教員養成課程でも，新しい授業のスタイルが求められている。筆者は，小学校教員養成を行う課程に所属し，上記の動向をふまえて新しい授業のスタイルを実施し，一定の教育効果を上げることができた。

以下本論文においては，筆者が実施したKP法（後述）と板書計画に基づいた授業の内容を明らかにした上で，今後のあるべき小学校歴史学習を提案していく。なお，以下の授業実践の内容は，平成28年度（2016年度）にＡ大学教育学部1年生134名に対して行ったものである。

２．学習指導要領から

新しい学習指導要領では，各教科についての「見方・考え方」が提示された。そのうち小学校社会科については，「社会的事象を，位置や空間的な広がり，時期や時間の経過，事象や人々の相互関係などに着目して捉え，比較・分類したり総合したり，地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」を「社会的事象の見方・考え方」として整理されている[1)]。このいわゆる小学校における社会的な見方・考え方のうち，歴史学習における基本として考えると，各地域・各時期における人物や出来事を注目しながら，それらを比較したり，分類したりすることが重要となる。

また，新学習指導要領における重要なポイントとしては，「知識・技能」，「思考力・判

＊　あまりひろき　大分大学教育学部小学校教育コース・初等中等教育コース

断力・表現力」，「学びに向かう力・人間性等」という三つの柱が設定されたことも看過できない。そして，

> 三つの柱に沿った資質・能力を育成するためには，課題を追究したり解決したりする活動の充実が求められる。社会科においては従前，小学校で問題解決的な学習の充実，中学校で適切な課題を設けて行う学習の充実が求められており，それらの趣旨を踏襲する。そうした学習活動を充実させるための学習過程の例としては，大きくは課題把握，課題追究，課題解決の三つが考えられる。また，それらを構成する活動の例としては，動機付けや方向付け，情報収集や考察・構想，まとめや振り返りなどの活動が考えられる[2)]。

とあるように，従来の問題解決的な授業を根底に置きながら，課題解決の側面を強調している。すなわち，課題把握，課題追究，課題解決の学習課程が明示されているのである。

この課題設定を重視する動きは，中学校社会科及び高等学校歴史総合でも見られるが，要点としては，現実的な課題に直接的あるいは間接的に裨益するような授業を展開し，現在そして未来における課題に対応できる人材を育成しようとする方向性が見いだせる。そのため，課題を設定して，それを正確に把握した上で，様々なツールを用いて探究し，最終的に当初の課題を解決するという一連の作業が求められたと考えられる。

３．中教審の答申から

新しい学習指導要領において指摘されている新たな動きとして，主体的・対話的で深い学びがある。このことについて，「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中教審第197号，平成28年12月21日中央教育審議会）において述べられているのは，次のような内容である。

> 質の高い深い学びを目指す中で，教員には，指導方法を工夫して必要な知識・技能を教授しながら，それに加えて，子供たちの思考を深めるために発言を促したり，気付いていない視点を提示したりするなど，学びに必要な指導の在り方を追究し，必要な学習環境を積極的に設定していくことが求められる。そうした中で，着実な習得の学習が展開されてこそ，主体的・能動的な活用・探究の学習を展開することができると考えられる[3)]。

これによると，学びに必要な指導の在り方を追究し，必要な学習環境を積極的に設定していくことが求められていると言える。このことが習得・活用・探究からなる学習の最初の出発点・基盤となっているのである。

それでは上記のことを進める上で，主体的・対話的で深い学びを成り立たせるためには，何が必要かについて，上掲の答申には，

> 「主体的・対話的で深い学び」の具体的な在り方は，発達の段階や子供の学習課題等に応じて様々である。基礎的・基本的な知識・技能の習得に課題が見られる場合には，それを身に付けさせるために，子供の学びを深めたり主体性を引き出したりといった工夫を重ねながら，確実な習得を図ることが求められる[4)]。

と説明されている。すなわち，学習の出発点における習得を確実なものにするためには，子供の発達段階や学習課題に応じて多様なものであり，また，知識・技能を習得するためには，工夫を重ねることが重要だと説かれている。

ここでいう工夫とは，言うまでもなく，子供の発達段階および学習環境を念頭に置きつつ，新しい発想に基づいた授業のメソッドである。

４．授業のメソッドについて

（1）KP法について

授業のメソッドについては，数え切れないほどの蓄積がある。しかし，その大部分はいわゆる特定の理論に基づき，中間レベルあるいはそれ以上の子供に対する授業実践である。しかし現実には，学習に興味がわかない，あるいは「テストに出るところだけ教えて」とすがるように教師にまとわりつく子供がいることにも目を向けるべきである。

そこで筆者は，知識としての基礎が押さえられ，さらには興味・関心がわく授業メソッドをとる必要性を痛感し，様々な授業メソッドの事例を検討する中で，KP法に着目した。

KP法とは，紙芝居プレゼンテーション法（“K”amishibai “P”resentation “法”）のことであり，キーワードあるいは短いセンテンスを書いた用紙（A4・B4・A3のいずれかの用紙）を順に貼っていき，説明する方法である。その具体的成果については，川嶋直氏・皆川雅樹氏らのもの[5]以外に，日本各地の高等学校，さらには大学でもみられている[6]。

では，このKP法の所与を，歴史学習，とりわけ将来小学校教員として社会科の授業で歴史学習を進めることが求められる大学生には，どのような魅力的な点があるかというと，次の2点にまとめられる。

・授業内容の焦点化と，それに対する背後にあるべき十分な教材研究(図１参照)

・学生自身による「主体的・対話的で深い学び」の意味の実感

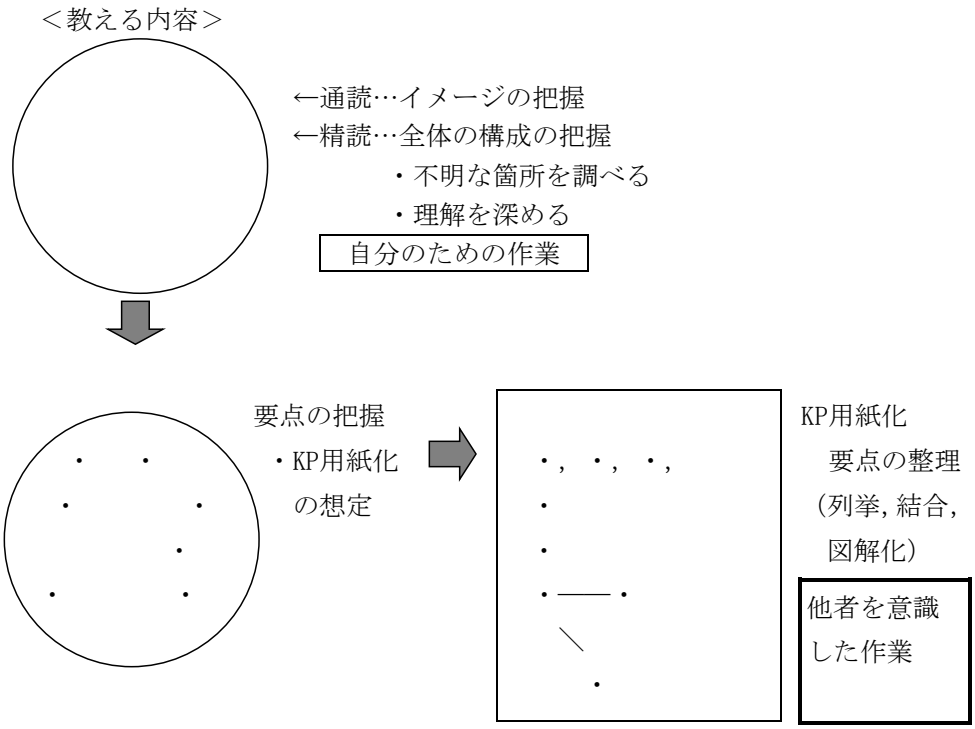

図１　KP用紙作成の作業工程（筆者作成）

一方で，活動においてフリーライダーを作らないことも大切である。そのため，本授業では，下に提示したような表に分担を確実に決めさせ，何らかの役割を自覚し，実行することを視野に入れている。

表　各グループの分担者名

担当内容	担当者名（苗字のみ）
タイムキーパー	
KP用紙担当	
ポスター担当	
提出用紙を書く担当	
学習指導要領を調べる担当	
発表者担当（KP用紙）	
発表者担当（ポスター）	
その他 （具体名：　　）	

（2）歴史授業の構成について

梅津正美氏は，中学校歴史的分野の授業の構成について，次のようなスタイルを論じておられる[7]。すなわち，歴史的分野の目標を踏まえた授業づくりの手立てとして，第一に，時期，推移，類似，差異，因果関係等の「見方・考え方」を働かせて，特定の時代の特色についての解釈（教育内容）とその典型事例（教材）とを設定すること。第二に，授業において教授学習する知識を，a.歴史的事象についての「事実」（記述的知識），b.諸事実間の「関係」（説明的知識），c.時代の「本質（特色）」（概念的知識）の相互の結び付きとして構造化すること。第三に，授業の過程を，①「何か」「どうなっているか」→②「なぜか」「どうするか」「何のためか」→③「諸事象の関係から見いだせる時代の特色は何か」→④「ある事象について，この時代とその前の時代あるいは現代社会と比較して，どのような変化や継続が見いだせるか」といった問いの流れで，子供が時代の「本質（特色）」と変化・継続を論理的に思考し追究していけるように体系的に組み立てること。こうした内容は，中学校のみではなく，小学校においても反映させることができる。

（3）アクティブ・ラーニングについて

アクティブ・ラーニングあるいは「主体的・対話的で深い学び」については，近年非常に多くの研究書・研究論文が発表されている。

それらの中で，田中博之氏は，主体的な学びとは何か，対話的な学びとは何か，深い学びとは何かのそれぞれについて，整理された説明を行っている[8]。

特に深い学びについては「深い学び」が成立するためのプロセスとして，次の「8つの段階」を示している。①課題設定，②志向，③メタ認知，④対話，⑤資料活用，⑥考察，⑦表現，⑧評価。この段階をふまえ，「深い学び」のある授業づくりの要素を，下記のようにまとめている。

学習目標―課題解決的な資質・能力の育成が含まれている。
学習課題―説明する・発見する・表現する・合意するなどの高次な課題になっている。
学習内容―資料から規則性を発見したり，資料集を越えた新しい資料を活用している。
学習形態―役割分担や意見交流をもとにして，課題解決ができる集団である。
学習方法―再構成・発見・検証・説明・論述・説得などの課題解決的な活動が多い。
活動系列―課題解決のための学習プロセスが明確になっている。
メディア活用―子どもたちが課題解決の道具としてICTを用いている。
教材・リソース―教材や資料から規則性や原理を発見することがねらいである。
学習環境―図書案や学習センターを活用して，資料活用による学習を行っている。
学習評価―ルーブリック評価や子どもたちによる自己評価や相互評価を行っている。

Ⅱ　方法

1．KP法を用いた授業実践

筆者が行ったKP法に基づく授業で，最初に行った説明は以下の通りである。

(1)第3回・第4回の授業では，グループごとに，KP用紙・ポスターを作成し，プレゼンテーシ

ョン（発表）をしてもらいます（質疑応答・講義もあり）。

(2)発表の準備として，KP用紙とポスターを作成してもらいます。

1)KP用紙には，「用紙1枚につき1行10文字以内，最大３行」「用紙は全体で10枚～15枚」で，下記のものを順番に書いてください（番号を用紙に書くのは不要）。②～⑦は，グループのメンバーで調査・話し合いをして記載してください。

①メインクエスチョン（MQ，学習課題）…各グループに割り当てられたもの

②MQについて，学習指導要領で求められているもの

③MQへのアプローチ（課題解決を効果的に行うための働きかけ・工夫）…どのような資料を使うか，児童とどんな質疑応答をするか

④MQについてグループ学習をした際，児童から出ると想定される回答（複数）

⑤メインアンサー（MA）へのアプローチ（まとめの作業）…どのような資料を使うか，児童とどんな質疑応答をするか

⑥MA

⑦次につなげる課題の提示

【注】台本や手元資料は×，ただしKP用紙の裏をカンペに使うのはOK。

2)ポスターは，KP用紙の内容に基づいた板書内容を，下記（５）の書式に従い作成すること。

(3)各グループの担当箇所

各グループは，「担当箇所」の中から，1つの学習課題についてプレゼンテーションします。なお，発表時間は1グループ10分です。

(4)分担を決める　　当然ながら，全員でプレゼンテーションの内容を検討します

・タイムキーパー　　・模造紙を書く担当　　・KP用紙を書く担当

・提出用紙を書く担当　　・学習指導要領を調べる担当

・発表者担当（KP用紙，ポスター）　　・その他

＊「表　各グループの分担者名」に，各担当者名を必ず記入する

(5)板書のパターン

＊番号はKP用紙の発表に対応(番号をポスターに書くのは不要)

＊事実確認は，④に対応して書くもので，絶対必要ではない

＊文字囲はあってもなくても可

(6)第2回のスケジュール

・教員の講義の後は，基本的に各グループの活動

・終了5分前までに，提出用紙（3種類のみ。内訳：板書内容・KP用紙(どちらもプレゼンテーションの内容を記入したもの)・個人の一言を書いたプリント）を揃えてクリップでまとめ，教員に提出。

・KP用紙・ポスターは，各グループで持ち帰って保管し，第3回の授業時に必ず持参すること。第3回以前に，加筆修正をしても構いません。

(7)第3回・第4回のスケジュール

・各グループの発表（「KP法による説明→板書の説明」の順序）・講義，各グループで改善案の検討

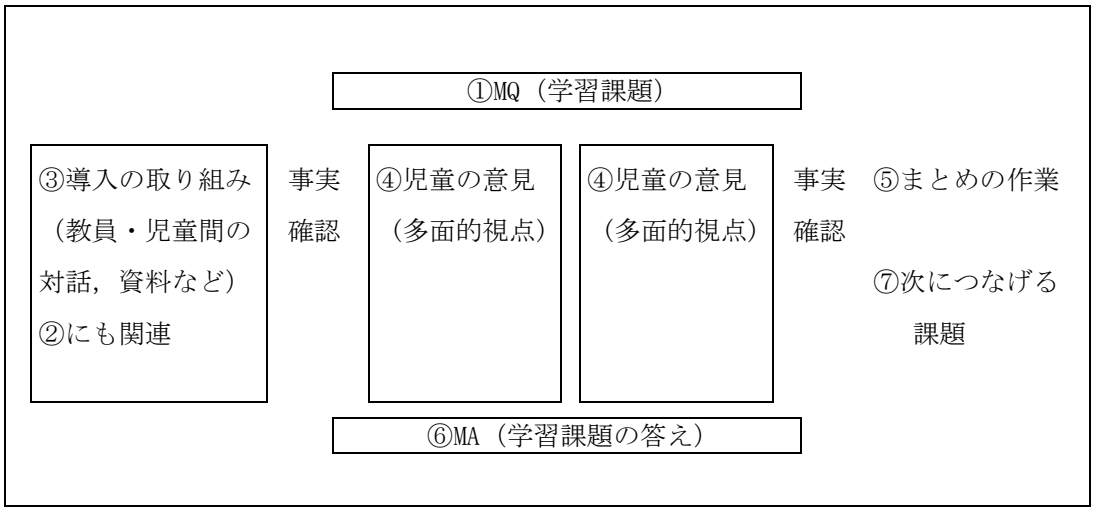

図２　板書のパターン

「担当箇所」
担当　　学習課題＝メインクエスチョン(MQ)と【関連する時代】

1　縄文と弥生では，どうして土器の形がちがうのだろう？【縄文～弥生時代】
2　どうやってこんなに大きなお墓を作ったのかな？【古墳～飛鳥時代】
3　大仏がどのようにできあがったのか調べてみよう！　【飛鳥・奈良・平安時代】
4　頼朝はどうして鎌倉に幕府を開いたのかな？【鎌倉～室町時代】
5　信長は，どうして自分の領土を広げることができたのだろう？【戦国～安土桃山時代】
6　どうして貿易を禁止して，鎖国をしたのかな？【江戸時代】
7　錦絵をみて，富岡製糸場が作られた理由を考えよう！【明治時代】
8　日本はどうやって立場を変えていったのかを調べよう！【明治～大正時代】
9　戦時中の国民の生活を調べよう！【昭和時代】
10 日本がわずか20年ほどで復興できた理由を調べよう！【昭和時代・戦後】
11 なぜ国家予算の３分の１もかけてオリンピックをしたの？【昭和時代・戦後】

なお，板書スタイル及び担当箇所は，朝倉一民氏の著書[9]の内容を参考・活用している。ただし，担当箇所のタイトル，すなわち課題は，より教育現場で使えるようなものに設定を変えている。

また，最後の「11 なぜ国家予算の３分の１もかけてオリンピックをしたの？【昭和時代・戦後】」は，グループ作りの際に必要になったため特に設定したものである。この課題は，北俊夫氏の著書[10]に掲載された授業実践例を引用・応用したもので，課題名は上記朝倉氏著書と同じく，変更した。

Ⅲ　考察・まとめ

１．KP用紙・板書案の検討

実際の授業は，各グループが11の担当箇所について，時間オーバーやKP法に基づく発表への戸惑いがみられたが，順調に発表を行っていたといえる。

ここでは，「5　信長は，どうして自分の領土を広げることができたのだろう？【戦国～安土桃山時代】」の発表内容の考察を試みたい。

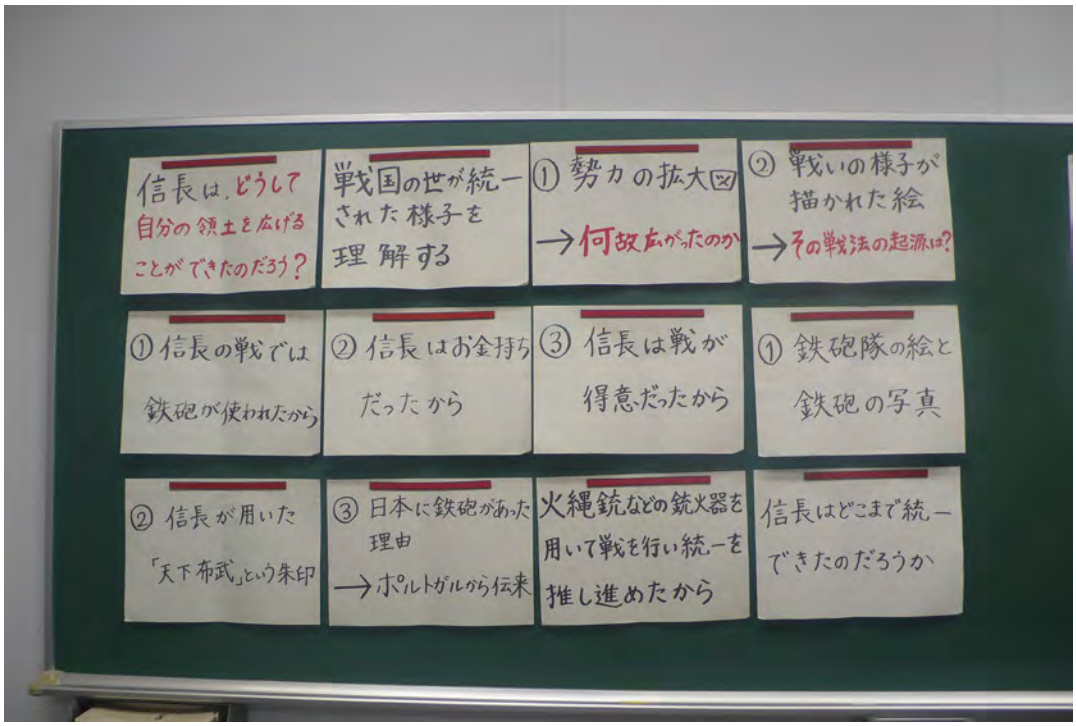

図３　「織田信長はどうして自分の領土を広げることができたのだろう？」のKP用紙

図３にみられる評価できる点は次のようにまとめられる。

・サブクエスチョンを作るという工夫を見せている。
・学習指導要領の要点をきちんと押さえていることが見て取れる。
・資料を複数用意して活用しており，実際の授業でも児童が活動する機会が与えられていることがわかる。
・子供の資料の読み取りから予想される意見が妥当なものになっている。この点は学生の授業構想力を評価することができる。
・次の授業へのつながりとしての，最後の問いは，織田信長の経済政策や豊臣秀吉の天下統一への話題にきちんと密接につながっている。

それでは次にこのKP用紙に基づいた板書案について追究していきたい。

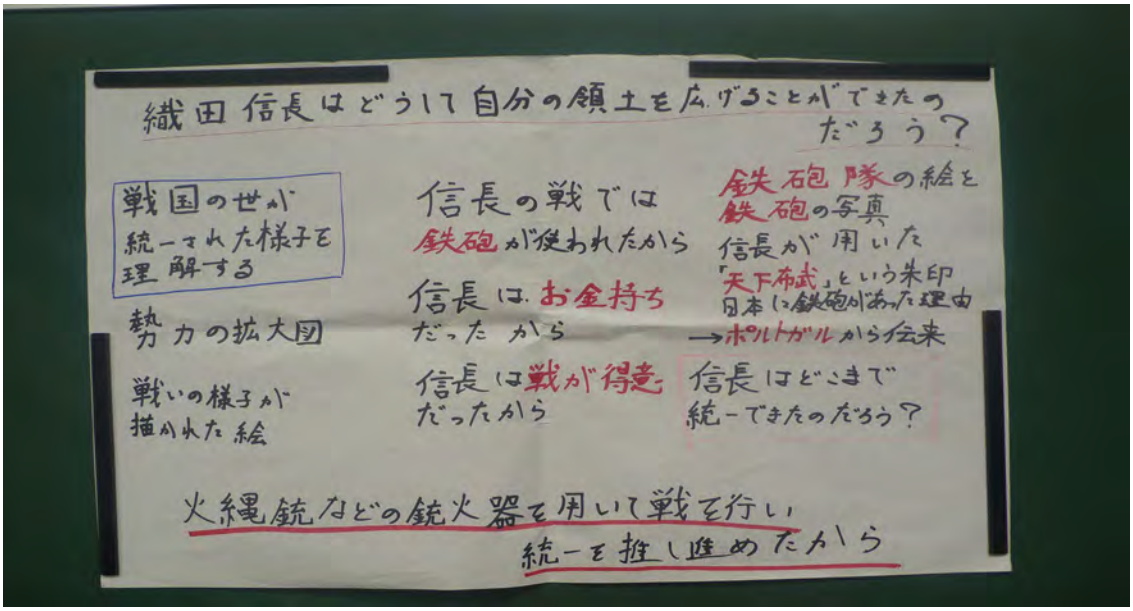

図４　「織田信長はどうして自分の領土を広げることができたのだろう？」の板書案

前述したとおり，板書案は朝倉一民氏の著書にあるフレームに基づいたものであるが，整然とまとめられている。また，白黒印刷のためわかりにくいが，重要語句を赤色で示すほか，アンダーラインや囲みでメリハリをつける工夫がなされている。

特に注目すべき点は，次の3点である。

①多くの資料の活用

板書案の記載を見るだけでも，勢力拡大図，戦いの様子が描かれた，鉄砲隊の絵，鉄砲の写真，「天下布武」の朱印のような図・絵画資料・写真資料が活用されていることがわかる。こうした課題への視覚的アプローチは，児童に興味・関心を惹き起こすだけではなく，さらに持続させるために有効と思われる。

②児童の発言の活用

児童の発言内容がまとめと密接にリンクしており，児童の発言を生かして児童が満足感・達成感を得られる可能性が高い展開が示されている。児童の発言を想定するとき，ややもすると教師側の理想が強く反映されて，我田引水的な発言案や無理のある発言案が立てられることがあるが，上記板書案の発言は，穏当なものになっている。その理由を考えると，先の①で挙げた充実した資料という裏付けがあること，課題設定から課題解決・次の課題設定までの展開がスムーズで，授業全体にまとまりがあることが挙げられる。

③MA・まとまり・次の課題の的確さ

②でも触れたが，授業全体にまとまりがある点が評価できる。そのまとまりの背景として，授業のまとめの質・量が適正であり，そのことによってメインアンサーがメインクエスチ

ョンに対してソフトランディングしている点が指摘できる。授業のまとめの質・量が適正であることは，授業で取り組む内容を，次の課題・次の授業へと適宜移していることの反映である。具体的に述べれば，信長の天下統一をめざした戦いがその死まで続いたこと，及び信長が鉄砲を購入できる経済的背景となったことは，次の授業で取り扱うこととされているのである。こうした授業づくりは，カリキュラム・マネジメントの観点から今後重視されるものと思われる。

２．学生アンケートの分析

以上の授業を通して，学生のアンケートを行った。回答の中には，KP法が難しかったという学生もいたが，8割の学生は，KP法を積極的に評価すること，少なくとも受け入れられることを表明していた。ただし，こうした回答内容は，授業の成績評価を踏まえてのものである可能性がないとは言えない。そこで，以下では，個々のアンケートの分析から，解明できた点を挙げ，追究していくことにしたい。

（1）工夫の大切さ

○どの班もそれぞれ個性が出ていて，見ている方も飽きることなく授業に集中できると思います。

○顔写真を持ってきたり，イラストを描いていたり，声色を変えて発表したり，特徴的な発表をすると心に残るということがわかった。

○歴史の内容も，もちろん重要ですが，発表の仕方で，ききとりやすかったり，頭に入ってくることが変わってくるので，授業をする際も発表の仕方を工夫したいと，この授業で思いました。

以上のような「工夫」に対する評価，そして「工夫」を自分自身も採り入れたい，構想したい，という意見は，今後の学習姿勢につながるものである。

（2）授業内容の発展の志向性（単元の深化と教科横断）

○板書を行う際は，教科書利用だけでなく，図説やインターネットを利用することで子ども達にさらに疑問や知識を身につけることができると感じた。

○今日の発表を通して，内容的には指導要領に沿っていても，次の授業内容につなげる疑問点まで考えなければいけないと分かった。

このように，授業内容をさらに発展させる必要性を感じる学生も見られた。とりわけ，その発展の方向性として，単元を意識した授業を目標とすることとを見定められていることは，カリキュラムを考える際の有益な心構えになり得る。

また，KP法と他の授業方法について，「このKPを使った授業は初めて考えたが，パワーポイントを作るときなどにためになると思った。」という意見があった。この意見について，当初筆者は，KP法とパワーポイントを相対立するものと捉え，否定的に思ったが，学生の視点に立つと，パワーポイントやレジュメのようなKP法以外のプレゼンテーション方式が大学での授業・演習では多いわけであり，むしろKP法を基盤にして，他のプレゼンテーション方法を模索するという方向性に賛同するようになった。

一方で，次のようなアンケート回答があった。

○今日発表したグループの中に，写真を印刷してきてて，それを資料として使っていたグループがあって，その資料も，国語と関連づけていたのですごいと思った。他の教科とのつながりがあると分かりやすいし，大切な事だと思った。

ここで指摘されている「写真の印刷・資料としての活用」・「国語との関連」は，「9 戦時中の国民の生活を調べよう！【昭和時代】」担当グループの，戦時中の生活を表した写真と小学校6年生国語で習う広島の原爆投下を取り上げた詩のことである。

写真の使用は，今回の授業の中で考えれば，KP用紙以外の使用は認めていないことにより，「ルール違反」である。また，詩を取り上げることは，社会科の教科書に掲載していない点から言えば，好ましくないことかもしれない。しかしこれらの表現は，教科横断型の授業の観点から，今後求められる授業スタイルの試みといえる。教科横断型の授業は新学習指導要領でも今後の発展が明記されており[10]，いわば異なる授業・異なるルールの下で，こうした授業提案が今後必要になる可能性も否めない。

（3）パラダイムシフト（歴史は暗記→歴史は考えるもの）

○ただ大事な要点を子どもに教えるだけでなく，背景にあることの流れを示すことが重要だということが分かった。

○今日は，自分達の発表でした。良かった点は問いかけが多かったところと，関心の持てる写真・イラストを使ったところです。年代をパパッと言われるのではなく，ストーリーを伝えないとやっぱり子供達は分からないし，関心を持ってくれないと思う。

○歴史はただ暗記するだけではなく，話の流れにそって学んでいったら，分かりやすいし，楽しくなることが分かりました。

○他のグループの発表を見て，児童の興味のひき方の違いを発見した。例えば写真を使ったり，体験者の話や表やグラフを利用していた。歴史は常に考えるものであることが大切だと知った。

○歴史に対して今まではとりあえず暗記をすればいいという考えしか持っていなかったが，今回の学習を通してKP法などの工夫をすることで暗記だけの表面上の理解ではなく，内面的な理解こそが大切だと思った。

以上のアンケートにおける共通点は，パラダイムシフトができていることである。学生が小学校で受けていた授業と現在・将来との違い，学習指導要領の改訂といった環境の変化を認識していないのに，授業を作る・工夫をするといっても，不十分なものになりかねない。ある意味精神的動揺が伴うものであるが，パラダイムシフトによる姿勢作りができた点は評価できるだろう。

（4）教師のイメージ化と実体化への志向

○大学生相手でさえも，書き方や伝え方をなやんで工夫するのだから，小学生相手だとより言葉選びや，内容の簡略化が必要だと思った。そのためには，あらかじめしっかりとした授業づくりが大切だと思う。みんなのグループ発表を見て，歴史の内容だけでなく，教師としての点も参考になった。

○自分たちが担当したところだけでも発表の準備にとても時間を使ったので，本当の先生になったらどんなに大変なんだろうかと思いました。

教育学部の1年生は，「教師になりたい」という気持ちがあっても，実際に教師に必要な資質・能力は発展途上であるし，知識・技能を大学教員等によって教え込まれるよりも，実体験する方が効果的に身につけられる場合がある。この点から，上記のアンケート回答では，教師として「言葉選び」・「内容の簡略化」・「授業準備の重要性」を認識できた点が評価できる。

このことに関係して，別のアンケート回答で次のようなものがあった。

〇先月附属中学校の社会科の授業を観察し，重要なところだけを板書するスタイルに心を打たれ，実践したが，逆にただ中身の無い板書になってしまった。

この回答そのものは，今回の授業実践に直接関係するものではないが，実際の授業に触れて，自らが授業実践を試みて失敗したことを記載している。この回答をした学生は，今回の授業実践を通して，自らの授業実践の失敗を思い出し，授業の要点を整理する難しさと教師力の不十分さを認識したと言える。また，複数の授業の往還を通して，教師に必要な資質・能力の育成に励めることを期待したい。

３. おわりに

本論文の主要な解明点をまとめると，次のようになる。

・KP法による授業の焦点化と，授業構成・歴史事実の把握・子供の育成という鳥瞰的視野の形成によって，知識・技能が身につき，思考・判断・表現の各能力もトレーニングすることができ，さらには興味を持ってもらう，わかりやすくするという学びに向かう力も併せて涵養することが可能である。これは，新学習指導要領に適応したものになる。

・KP法は，パワーポイントや板書などと対比的に検討されてきたが，KP法をパワーポイントへ，あるいはレジュメ化へ，という形で，大学生の日頃の授業・演習に役立つ要素が存在する。

・KP法による教科横断型授業が可能である。

・上記の2点は，筆者が学生アンケートの結果から得られたものである。このように，授業形式の提案を教師・学生がすることで，新しい授業の改善・工夫が生み出されることが指摘できる。

以上のようにKP法は，授業について止まるところを知らない改善に資するものであり，教員を目指す学生にとって，少なくとも一度は体験する価値がある学習方法であると説明できるだろう。

なお，今回の授業実践における評価方法及び省察・改善については，今後の課題としたい。

注

1) 「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　社会編」文部科学省　2018年
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_003.pdf.

なお，小学校社会科における新しい学習指導要領における改善点は，中央教育審議会答申の中の，社会科，地理歴史科，公民科の全体に関わる改善について示している事項をまとめた「社会科，地理歴史科，公民科の改善の基本方針及び具体的な改善事項」によると，次の（ⅰ）社会科，地理歴史科，公民科の改善の基本方針，（ⅱ）社会科，地理歴史科，公民科の具体的な

改善事項のように記述されている。なお，下線部は小学校社会科に関する箇所を指し，引用者が付したものである。

（ⅰ）社会科，地理歴史科，公民科の改善の基本方針

○社会科，地理歴史科，公民科における教育目標は，従前の目標の趣旨を勘案して「公民としての資質・能力」を育成することを目指し，その資質・能力の具体的な内容を「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力等」，「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱で示した。

その際，高等学校地理歴史科，公民科では，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を，小・中学校社会科ではその基礎をそれぞれ育成することが必要である。

○資質・能力の具体的な内容としては，

「知識・技能」については，社会的事象等に関する理解などを図るための知識と社会的事象等について調べまとめる技能として，

「思考力・判断力・表現力等」については，社会的事象等の意味や意義，特色や相互の関連を考察する力，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて構想する力や，考察したことや構想したことを説明する力，それらを基に議論する力として，

また，「学びに向かう力・人間性等」については，主体的に学習に取り組む態度と，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される自覚や愛情などとして，それぞれ校種の段階や分野・科目ごとの内容に応じて整理した。

○「社会的な見方・考え方」は，課題を追究したり解決したりする活動において，社会的事象等の意味や意義，特色や相互の関連を考察したり，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて構想したりする際の視点や方法であると考えられる。そこで，小学校社会科においては，「社会的事象を，位置や空間的な広がり，時期や時間の経過，事象や人々の相互関係などに着目して捉え，比較・分類したり総合したり，地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」を「社会的事象の見方・考え方」として整理し，中学校社会科，高等学校地理歴史科，公民科においても，校種の段階や分野・科目の特質を踏まえた「見方・考え方」をそれぞれ整理した。その上で，「社会的な見方・考え方」をそれらの総称とした。

○こうした「社会的な見方・考え方」は，社会科，地理歴史科，公民科としての本質的な学びを促し，深い学びを実現するための思考力，判断力の育成はもとより，生きて働く知識の習得に不可欠であること，主体的に学習に取り組む態度や学習を通して涵養される自覚や愛情等にも作用することなどを踏まえると，資質・能力全体に関わるものであると考えられる。

（ⅱ）社会科，地理歴史科，公民科の具体的な改善事項

○三つの柱に沿った資質・能力を育成するためには，課題を追究したり解決したりする活動の充実が求められる。社会科においては従前，小学校で問題解決的な学習の充実，中学校で適切な課題を設けて行う学習の充実が求められており，それらの趣旨を踏襲する。

○そうした学習活動を充実させるための学習過程の例としては，大きくは課題把握，課題追究，課題解決の三つが考えられる。また，それらを構成する活動の例としては，動機付けや方向付け，情報収集や考察・構想，まとめや振り返りなどの活動が考えられる。

○社会科，地理歴史科，公民科の内容については，三つの柱に沿った資質・能力や学習過程の在り方を踏まえて，それらの趣旨を実現するため，次の二点から教育内容を整理して示すことが求められる。
視点の第一は，社会科における内容の枠組みや対象に関わる整理である。小学校社会科では，中学校社会科の分野別の構成とは異なり，社会的事象を総合的に捉える内容として構成されている。そのため教員は，指導している内容が社会科全体においてどのような位置付けにあるか，中学校社会科とどのようにつながるかといったことを意識しづらいという点が課題として指摘されている。そのことを踏まえ，小・中学校社会科の内容を，①地理的環境と人々の生活，②歴史と人々の生活，③現代社会のしくみや働きと人々の生活という三つの枠組みに位置付ける。また，①，②は空間的な広がりを念頭に地域，日本，世界と，③は社会的事象について経済・産業，政治及び国際関係と，対象を区分する。（以下略）

2) 同前注。
3) 同前注。
4) 同前注。
5) 川嶋直・皆川雅樹共編（2016）『アクティブラーニングに導くKP法実践　―教室で活用できる紙芝居プレゼンテーション法』（みくに出版　2016年）。
6) 高校の事例では，及川俊浩・杉山比呂之『アクティブ・ラーニング実践集　世界史』（山川出版社　2019年）等。大学の事例では，土屋善和・千葉眞智子「『知識構成型ジグソー法』と『KP 法』を取り入れた授業の試み ： 高齢社会を題材とした授業改善に向けた大学教員と家庭科教員の取り組み」（『琉球大学教職センター紀要』2　2020 年），甘利弘樹「教養教育科目における中国史授業のアクティブラーニング化の試み」（『大分大学高等教育開発センター紀要』11　2019年）等。
7) 梅津正美「社会科における『見方・考え方』―追究の視点と授業デザイン　歴史：『見方・考え方』を働かせた歴史授業デザイン」『社会科教育』編集部編『平成29年度版学習指導要領改訂のポイント　小学校・中学校社会』（明治図書出版　2017年）。
8) 田中博之編『アクティブ・ラーニング　実践の手引き　―各教科等で取り組む「主体的・協働的な学び」』教育開発研究所　2016年　，田中博之編『アクティブ・ラーニング「深い学び」　実践の手引き　―新学習指導要領のねらいを実現する授業改善』（教育開発研究所　2017年）。
9) 朝倉一民『子ども熱中！小学社会「アクティブ・ラーニング」授業モデル』（明治図書出版　2016年），
10) 北俊夫『“知識の構造図” を生かす問題解決的な授業づくり　社会科指導の見える化＝発問・板書の事例研究』（明治図書出版　2015年）。
11)「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」（中教審第197号，平成28年12月21日中央教育審議会）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf

参考文献等

朝倉一民　『子ども熱中！小学社会「アクティブ・ラーニング」授業モデル』明治図書出版　2016年

甘利弘樹　「教養教育科目における中国史授業のアクティブラーニング化の試み」『大分大学高等教育開発センター紀要』11　2019年　pp.41-56

梅津正美　「社会科における『見方・考え方』―追究の視点と授業デザイン　歴史：『見方・考え方』を働かせた歴史授業デザイン」『社会科教育』編集部編『平成29年度版学習指導要領改訂のポイント　小学校・中学校社会』明治図書出版　2017年　pp.34-37

及川俊浩・杉山比呂之『アクティブ・ラーニング実践集　世界史』山川出版社　2019年

川嶋直・皆川雅樹共編『アクティブラーニングに導くKP法実践　―教室で活用できる紙芝居プレゼンテーション法』みくに出版　2016年

北俊夫　『“知識の構造図” を生かす問題解決的な授業づくり　社会科指導の見える化＝発問・板書の事例研究』明治図書出版　2015年

田中博之編『アクティブ・ラーニング　実践の手引き　―各教科等で取り組む「主体的・協働的な学び」』教育開発研究所　2016年

――――　『アクティブ・ラーニング「深い学び」　実践の手引き　―新学習指導要領のねらいを実現する授業改善』教育開発研究所　2017年

土屋善和・千葉眞智子「『知識構成型ジグソー法』と『KP法』を取り入れた授業の試み：高齢社会を題材とした授業改善に向けた大学教員と家庭科教員の取り組み」『琉球大学教職センター紀要』2　2020年　pp.1-11

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　」文部科学省　2018年
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_003.pdf（最終閲覧日：2021年11月30日）

「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中教審第197号，平成28年12月21日中央教育審議会）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（最終閲覧日：2021年11月30日）

A New Trial of the Teaching Method of Social Studies:
Through the Practice of Classes Using KP Method

AMARI, Hiroki

Abstract

The purpose of this study is to analyze the class practice of teaching method of social studies using KP Method (Kamishibai Presentation hou). Through the class practice, the deepening of the factor of active learning in teaching method of social studies was recognized.

Key words : teaching method of social studies, active learning, KP method